

『福山大学経済学論集』
第45巻
(2021年3月) 抜刷

シラバス分析によるスポーツマネジメント教育の検討

野田 光太郎

シラバス分析によるスポーツマネジメント教育の検討

野田 光太郎¹

【概要】

本論では、スポーツマネジメントの名称を冠する 106 の講義科目のシラバスに示された授業の概要、到達目標、授業計画に関する記述を分析することによって、以下の 3 点を明らかにした。スポーツマネジメントについて教える授業のなかでは、日本社会全体・企業・学校・地域社会といった様々な次元での取り組みが授業の対象として取り扱われているということ、理論と実践の両面からの議論や検討が重視されているということ、すでに組織化されている組織をどのように運営するか、という部分がマネジメントだとみなされていることである。スポーツマネジメントをテーマとした授業の課題は、スポーツに関与する集団の組織化により光を当てることだと結論付けた。

Key words : スポーツマネジメント教育, シラバス分析, KH コーダー

1.問題と目的

松岡¹⁾によれば、日本のスポーツマネジメント研究・教育は、体育の組織と管理を主とする体育管理学を源流としている。スポーツが実施される場の広がりや、プロスポーツなどの「見るスポーツ」の隆盛とともに研究対象は拡大し、研究の視点もマーケティング、ファイナンス、法なども含むものとなった。

スポーツマネジメント教育が「スポーツマネジメントとは何か」を明確に示すことができないまま実施されているという松岡の指摘を受けて、櫻井他²⁾や備前他³⁾ではスポーツマネジメント教育のカリキュラム編成が分析されている。櫻井他²⁾はスポーツマネジメントを扱う授業の中で、知識と実践の融合が企図されていることを明らかにし、備前他³⁾は各大学が様々な科目を提供していることを指摘した。またいずれの先行研究も、スポーツマネジメント教育とは何か、どうあるべきかがいまだに明確ではないことを今後の課題としている。

本論では、スポーツマネジメント教育とは何かを明らかにするという問いをこれらの先行研究と共有し、先行研究が取り組んでいない、シラバスの内容を分析対象とする。カリキュラム編成や開講科目の名称の全体像は先行研究によって明らかにされたものの、実際の教育

¹ 福山大学経済学部

内容を知るには、科目の名称以上にシラバスが手がかりとなるのではないか。そのため本論では、とくに「スポーツマネジメント教育とは何か」に関わるシラバスの記述内容、すなわち授業の概要、授業の到達目標、各回の授業内容に関する計画を説明した部分を分析し、「スポーツマネジメント教育の名の下で、実際にはどのような授業が行われているのか」を明らかにすることを目的とする。

2.対象と方法

「スポーツ関連大学の入試情報一覧」⁴⁾に掲載された197大学の、インターネット上で外部に公開されているシラバスを調査対象とした。調査期間は2020年10月16日～2020年10月31日であった。

シラバス抽出の条件は以下の通りである。①2020年度に開講されている科目を調査対象とした。②科目名に「スポーツマネジメント」もしくは「スポーツ・マネジメント」という語句が含まれるものを抽出した。③科目名に②に示した語以外が追加されているもの、例えば、「健康スポーツマネジメント」、「スポーツクラブマネジメント」、「スポーツマネジメント・ビジネス」などの科目は除外した（スポーツマネジメントの基礎的な部分を教えるものではなく、応用科目として特定分野を扱っていることが想定されるため）。ただし、「スポーツマネジメント研究」など、授業の種類を記載したと考えられる語がついている場合は、除外しないこととした。④複数科目で同一内容のシラバスが確認された場合は、1つのシラバスとして扱った。⑤「スポーツ関連大学の入試情報一覧」⁴⁾に掲載されていない学部の開講科目や大学院開講科目は除外した。なお、各大学の検索システムとシラバスの構成上、開講学部・学科や大学院開講科目か否かが判断できない場合は、シラバスの内容やインターネット上で公開されているカリキュラムマップ、提供科目情報などの情報を参考に判断した。⑥新型コロナウイルス感染症対策に関する追記事項などがある場合は、追記事項も分析対象とした。

以上の条件により170科目のシラバスを抽出した。これを講義名および記載内容に応じて実習・演習科目と講義科目に区別したところ、実習・演習64科目、講義106科目（表1）であった。本論では、授業計画や授業の概要が明示されていることから、講義科目のみを対象に分析を行った。なお、授業内容の一部に学生自身による分析など演習といえる内容が含まれている場合でも、主に講義が行われている科目については講義科目とみなした。

シラバスに記載された項目のうち、「授業の概要」「授業計画」「到達目標」をそれぞれ分析した。「授業の概要」は、各大学のシラバスの「授業の概要」「授業内容」「授業のテーマ」欄

に記された項目を使用した。「授業の概要」欄には授業の実施方法のみ書かれており、授業内容の概要が「授業の目的」欄に書かれている場合は、「授業の目的」を対象データとした。ただし、各大学のカリキュラムポリシーまたはディプロマポリシーとの関係、オンラインか対面かについての情報は分析対象外とした。「到達目標」「授業計画」は、これらの項目に示された記載内容を分析した。ただし「授業計画」欄内に予習・復習の内容や参考文献の書誌情報が書かれている場合は、分析対象外とした。

シラバスの内容はスプレッドシートに入力し、「授業の概要」「到達目標」「授業計画」のそれぞれについて、KH コーダーを用いて頻出語を調べ、共起ネットワーク図を作成することにより語の関係について検討した。なお、誤字脱字は基本的には原文ママとしたが、あきらかな間違いは修正した（例：「理解ディナー招待きる」を「理解できる」に修正）。

表1. 分析対象とした科目

大学名	科目名	大学名	科目名	大学名	科目名
北海道教育大学	スポーツマネジメント	日本体育大学	スポーツマネジメント	びわこ学院大学	スポーツマネジメント
札幌国際大学	スポーツマネジメント論	日本体育大学	スポーツマネジメント論	京都産業大学	スポーツマネジメント
札幌大学	スポーツマネジメント	日本体育大学	スポーツマネジメント研究 B	同志社大学	スポーツ・マネジメント特論
北翔大学	スポーツマネジメント	横浜商科大学	スポーツマネジメント研究	京都光華女子大学	スポーツマネジメント論
青森大学	スポーツマネジメント論	星槎大学	スポーツマネジメント	大阪成蹊大学	スポーツマネジメント基礎 I / スポーツマネジメント入門
仙台大学	スポーツマネジメント概論	東海大学	スポーツマネジメント論	大阪成蹊大学	スポーツマネジメント基礎 II
作新学院大学	スポーツマネジメント論	山梨学院大学	スポーツマネジメント論 I	大阪成蹊大学	スポーツ経営論 / スポーツマネジメント論
上武大学	スポーツマネジメント論	山梨学院大学	スポーツマネジメント論 II	大阪経済大学	スポーツマネジメント
関東学園大学	スポーツマネジメント論入門 I	山梨学院大学	スポーツマネジメント論 (スポーツマーケティングを含む)	大阪学院大学	スポーツマネジメント論 A101
関東学園大学	スポーツマネジメント論入門 II	松本大学	スポーツマネジメント論	大阪学院大学	スポーツマネジメント B101
埼玉学園大学	スポーツマネジメント論	新潟医療福祉大学	スポーツマネジメント論	追手門学院大学	スポーツマネジメント論
浦和大学	スポーツマネジメント	新潟経営大学	スポーツマネジメント論 I	大阪国際大学	スポーツマネジメント
平成国際大学	スポーツマネジメント論	新潟経営大学	スポーツマネジメント論 II	摂南大学	スポーツマネジメント
尚美学園大学	スポーツマネジメント	富山大学	スポーツマネジメント	大阪産業大学	スポーツマネジメント論
尚美学園大学	スポーツマネジメント論	金星星稜大学	スポーツマネジメント論	阪南大学	スポーツマネジメント入門 2
東京国際大学	スポーツマネジメント	福井工業大学	スポーツマネジメント	阪南大学	スポーツマネジメント入門 (別) スポーツマネジメント入門 1

東洋大学	スポーツマネジメント論	静岡大学	スポーツマネジメント論	阪南大学	基礎スポーツマネジメント
東洋大学	スポーツマネジメント/スポーツマネージメント	静岡産業大学	スポーツマネジメント論	阪南大学	応用スポーツマネジメント
日本薬科大学	スポーツマネジメント学	常葉大学	スポーツマネジメント論	大阪教育大学	スポーツマネジメント論
千葉大学	スポーツマネジメント国際比較	愛知産業大学	スポーツマネジメント	羽衣国際大学	スポーツマネジメント論
東洋学園大学	スポーツマネジメント	大同大学	スポーツマネジメント1	神戸親和女子大学	スポーツマネジメント総論
順天堂大学	スポーツマネジメント論	大同大学	スポーツマネジメント2	流通科学大学	スポーツマネジメント論
順天堂大学	スポーツマネジメント特別講義	大同大学	スポーツマネジメント3	園田学園女子大学	スポーツマネジメント
東京成徳大学	スポーツマネジメント	愛知東邦大学	スポーツマネジメント	武庫川女子大学	スポーツマネジメント論
帝京平成大学	スポーツマネジメント論	愛知東邦大学	スポーツマネジメント	関西福祉大学	スポーツマネジメント
国際武道大学	スポーツマネジメント	愛知東邦大学	スポーツマネジメント基礎	天理大学	スポーツマネジメント
法政大学	スポーツマネジメント論	愛知みずほ大学	スポーツマネジメント	倉敷芸術科学大学	スポーツマネージメント
国士舘大学	スポーツマネジメント	日本福祉大学	スポーツマネジメント	吉備国際大学	スポーツマネジメント論
日本女子体育大学	スポーツマネジメント	星城大学	スポーツマネジメント論	徳山大学	スポーツマネジメント
立教大学	スポーツマネジメント論	中部大学	スポーツマネジメント論	高松大学	スポーツマネジメント論
大東文化大学	スポーツマネジメント	朝日大学	スポーツマネジメント	九州共立大学	スポーツマネジメント
亜細亜大学	スポーツマネジメント論	中部学院大学	スポーツマネジメント	九州産業大学	スポーツマネジメント論
神奈川大学	スポーツマネジメント	びわこ成蹊スポーツ大学	スポーツマネジメント学概論	西九州大学	スポーツマネジメント論
桐蔭横浜大学	スポーツマネジメント	びわこ成蹊スポーツ大学	スポーツマネジメント特別講義	九州保健福祉大学	スポーツマネジメント
日本体育大学	スポーツマネジメント研究 A	立命館大学	スポーツマネジメント論		
日本体育大学	スポーツマネジメント	立命館大学	スポーツマネジメント特殊講義		

3.結果

3.1 授業の概要

「授業の概要」欄には、基本的には「スポーツマネジメント」という概念についての解説が含まれていた。これは、学生がこの語になじみがないことを想定しているためであると考えられる。解説の内容は、多様なレベル（プロ、地域、学校など）のスポーツ組織が運営される手法の総称とするものや、社会全体にスポーツを促進するために有益な理論または方法として説明するものが多かった。

多くの科目において最大の焦点とされているのは、スポーツ組織のマネジメントを実践的な視点から学ぶということ、またはマネジメントや経営学の視点からスポーツをめぐる様々な事象を理解することであった。前者をより重視していると考えられる例として、立命館大

学「スポーツマネジメント論」の「授業の概要と方法」を引用する。

スポーツマネジメントとは、スポーツ組織の使命や目的を達成するために行われる人間の活動であり、同時に人々のスポーツライフの質を高め、文化としてのスポーツを振興するために人間の英知を結集させた営みのことである。本講義では、「する・みる・ささえる・つくる」といった人とスポーツのかかわりの多面性を考慮し、公共機関から営利目的の企業までを事例に上げながら、人・組織・社会とスポーツの関係をデザインするために必要な視座に対する理解を深め、それを実践の場で活かすための基礎知識を身につけることを目的とする⁵⁾。

経営学の視点からスポーツを理解するというアプローチをとくに重視していると考えられる講義の例は、東洋学園大学「スポーツマネジメント」の「講義の目的・内容」である。

スポーツマネジメントは経営学（マネジメント）をスポーツに応用した特殊経営学であり、親学問で確立された汎用性の高い理論で、スポーツの現場においても一般化が可能であるものをスポーツ現場の実例と経営理論を照らし合わせながら紹介する。しかし、スポーツ経営者が、試合展開や結果を予測できない不確実性があるという固有の特徴があり、その独自性から他領域の経営理論をスポーツビジネスの現場で実践的に正確な理論を導き出すためには、他領域の理論を借りるのではなく、それらをスポーツマネジメントの特殊性や独自性を考慮しながら調整し、スポーツマネジメントの独自の理論として確立したものもあるため、スポーツが経営される時に確認できる固有の概念や理論について、理論と実践の違いと理論を実践へ応用することを履修生が理解し、社会で活用できるよう紹介していく。

プロスポーツとその他スポーツ組織とのマネジメントの違いに留意し、ガバナンス、経営資源、コンプライアンス、アカウントビリティについて注目し解説をする⁶⁾。

以上の2科目のように、多くのシラバスでは具体例と理論の両方を授業で扱うことが示唆されつつ、具体的な事例と理論のいずれに重点を置くかに違いが見られた。理論的側面については、上記の例のように、スポーツマネジメントが依拠する学問領域を経営学とするものが多かったが、京都産業大学「スポーツマネジメント」など、政策研究の視点を提示する例

もあった。

これらの他に、特色ある視点からスポーツマネジメントにアプローチする例も見られた。たとえば順天堂大学「スポーツマネジメント特別講義」では、国際連合や国際的な競技団体がスポーツを活用して多様な国際的課題に取り組む試みが 21 世紀には増えていることが説明された上で、「国際開発の歴史とスポーツの関係性及びスポーツがもたらす功罪を理解し、国際的な開発課題の解決ならびに持続可能な社会の実現のために、スポーツが果たす事ができる役割を考察する」⁷⁾ことを授業全体の内容としている。これは同大学で開講されている、より基礎的な内容である「スポーツマネジメント論」を履修した上で履修することが望ましいとされている科目であり、スポーツマネジメントに関する総論的な内容を学んだ学生が、発展的学修として取り組むことを想定してテーマ設定が行われたと考えられる。このように、同一教育課程内でスポーツマネジメントに関連する科目が複数提供されている場合には、「スポーツマネジメントとは何か」から一步踏み込んだ内容の授業が行われている例が見られた。

全体的な内容の傾向については、KH コーダーを用いて「授業の概要」に記述された文章に使用された語を抽出することで把握を試みた。総抽出語数は 11,613 であった。頻出語上位 50 語は表 2 の通りであった。

表 2. 「授業の概要」の中に使用された語のうち、頻出 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
スポーツ	535	基礎	29	具体	18
マネジメント	213	事例	28	視点	18
理解	70	様々	28	現代	17
授業	69	学習	27	考える	17
経営	66	プロ	26	領域	17
組織	64	行う	26	概念	16
学ぶ	59	目的	26	指導	16
講義	59	ビジネス	24	人	16
社会	47	事業	24	日本	16
地域	43	深める	23	方法	16
知識	40	運営	22	問題	16
活動	37	学校	20	人々	15
必要	36	基本	20	競技	14
クラブ	34	企業	19	身 ※ ²	14
実践	34	現場	19	役割	14
理論	31	産業	19	管理	13
課題	29	解決	18		

まず、「組織」「運営」といった、スポーツをする集団の運営・管理に関わる語が多く使用

² 「身につく」など

されている。「社会」「地域」が「ビジネス」「企業」「産業」よりも多く使用されている点については、「社会」はスポーツマネジメントを学ぶ背景にある社会全般に言及する例が多いこと、「地域」は企業スポーツだけでなく地域スポーツもスポーツマネジメントの対象であることを示す例が多いことによる。

上述した個別のシラバスの例については、スポーツマネジメントとは何かということそれぞれのアプローチで解説する内容を確認したが、全体的な傾向としても、スポーツマネジメントの対象は何か、スポーツマネジメントとは何かを解説するための語が多く使用されていることがわかる。

「理論」と「実践」が同じ位の頻度で使用されている点からは、やはり理論と実践の両方に目を向けた授業が望ましいと考えられる傾向がうかがい知れる。後述する共起ネットワークからも、理論と実践が組み合わさることで理解が深まるという考えが提示されていることがわかる。

3.2 到達目標

一般的に「到達目標」には、授業を受講することによって受講生に身につく知識やスキルが書かれる。そのため、「授業の概要」と対応する内容が書かれている例が多かった。おおまかに標準化して書けば、スポーツマネジメントの特徴を適切に把握し、今後のスポーツマネジメントについての考えをもつことができる、というものが到達目標の主流であった。

KH コーダーを用いて「到達目標」に記述された文章に使用された語を抽出したところ、総抽出語数は6,619であった。頻出語上位50語は表3の通りであった。

表3. 「到達目標」の中に使用された語のうち、頻出50語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
スポーツ	278	学ぶ	17	考える	12
マネジメント	142	必要	17	事業	12
理解	142	問題	17	マーケティング	11
知識	42	地域	16	解決	11
組織	41	クラブ	15	講義	11
説明	37	ビジネス	15	役割	11
課題	34	運営	15	概念	10
基礎	34	授業	15	現代	10
経営	31	習得	14	考え	10
社会	28	方法	14	捉える	10
力	27	目標	14	体育	10
理論	26	現場	13	領域	10
身	23	視点	13	DP	9
様々	22	深める	13	概要	9
実践	19	関連	12	活用	9

活動	18	具体	12	指導	9
基本	18	現状	12		

「授業の概要」と類似した言葉が使用されていることがわかる。「マーケティング」や「体育」は「授業の概要」上位 50 語には含まれていないものの、「授業の概要」欄内でも「マーケティング」は 12 回、「体育」は 13 回出現しており、「到達目標」と同程度使用されていたといえる。

3.3 授業計画

「授業計画」には、各回の授業で扱われるテーマやトピックが示されている。多くの大学で、この欄は文章ではなく短いフレーズで書かれていた。

KH コーダーを用いて「授業計画」に記述された文章に使用された語を抽出したところ、総抽出語数は 29,068 であった。頻出語上位 50 語は表 4 の通りであった。

表 4. 「授業計画」の中に使用された語のうち、頻出 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
スポーツ	1826	日本	68	競技	49
マネジメント	815	計画	65	構造	49
組織	256	施設	65	評価	48
地域	221	戦略	62	活動	47
クラブ	219	役割	62	現状	47
経営	185	リーグ	60	団体	47
理解	166	チーム	59	事例	46
プロ	141	イベント	58	体育	46
事業	136	学校	58	方法	45
マーケティング	126	必要	58	管理	44
回	114	サービス	57	説明	42
授業	100	解説	56	ガイダンス	41
運営	96	学ぶ	55	振興	41
課題	94	考える	55	知識	41
ビジネス	89	内容	55	グループ	40
総合	82	社会	54	基礎	40
産業	74	x{00a0} ※ ³	53		

表 4 の語のうち、とくに内容に関わると考えられるものを線で囲んだ。「授業の概要」や「到達目標」では上位にあがっていた「社会」という語の出現回数が「授業計画」の中では相対的に少ない。これは、前述の通り「社会」をスポーツマネジメントの背景として位置付けている例が多いために、授業のテーマとしては取り上げられにくいことを示しているのではないかと考える。

³ 改行のこと

「体育」については、(1) 学校体育のマネジメント、(2) 「体育会系」の人材のキャリア構築、(3) NCAA (全米大学体育協会) が授業のテーマとして設定されている例と、「体育・スポーツ」という表現を用いている例が見られた。

3.4 共起ネットワークの比較

次に、語の出現パターンを知るために、KH コーダーを用いて「授業の概要」「到達目標」「授業計画」の共起ネットワークを比較する。なお共起ネットワークは、共起の程度が強い語同士を線でつなげて表示するものであり、マッピングではないことに注意が必要である。

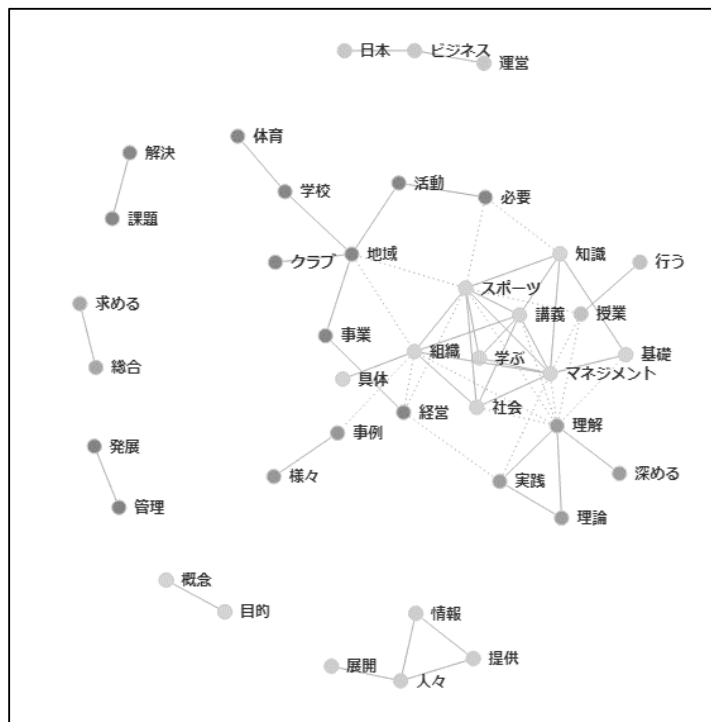


図1. 「授業の概要」の共起ネットワーク

いずれの共起ネットワークからも、スポーツマネジメントにとって最大のテーマが「組織」であることがわかる。ここから、スポーツのマネジメントについて考える際に最も注目すべき構造または単位が「組織」であるととらえられていることが推測できる。換言すれば、スポーツをマネジメントするということは、スポーツに関与する組織をマネジメントするということだ、という前提が多く授業で共有されていると読み取れる。

この「組織」という語を「組織化」という複合名詞で使用している例は、「授業の概要」では3例、「到達目標」では0、「授業計画」では3例であった（「授業の概要」の3例と「授業計画」の3例は別の科目）。したがって、スポーツに関与する集団（特定の構造によって組織される以前の、人の集まり）を組織化するということをスポーツマネジメントの範疇でとらえる例は少ないといえる。

次に、「理論」と「実践」に注目すると、「授業の概要」「到達目標」ではいずれも「理論」と「実践」が共起しており、さらに「授業の概要」ではこれらの語が「理解」と共起していることから、理論的な側面と実践的な側面の両方を検討することの重要性が意識されているのではないかと考えられる。

3つの共起ネットワーク間で違いが見られるのは、「ビジネス」がどの語と共起するかという点である。「ビジネス」は、いずれの項目でも頻出語上位50語に含まれていた語であり、「授業の概要」では「日本」と「運営」の2語、「到達目標」では「活動」「現場」「知識」の3語（なお実線と点線の別は語の種類が同じか異なるかによるものであり、関係の強さではない）、「授業計画」では「スポーツ」「マネジメント」「組織」の3語との共起が見られた。「授業の概要」では「ビジネス」と共起する語が他の語とは共起関係が見られないことから、スポーツマネジメントについて論じる際に中心的な視点とまではいえないとみなされているのではないかと考えられる。「到達目標」に関しても、おそらく重要性が高い語である「理解」と共起する語（「スポーツ」「マネジメント」「基礎」「知識」「課題」「理論」「組織」「社会」）の中に「ビジネス」は含まれておらず、やはり必須のキーワードとは考えにくい。一方で、「授業計画」の中では科目の名称である「スポーツ」「マネジメント」のいずれとも共起していることから、一定程度以上の重要性をもって扱われているトピックなのではないかと考えられる。つまり、スポーツビジネスについて論じることはスポーツマネジメントを学ぶうえで必須であるとまでは考えられていないものの、実際の授業のなかでは取り扱われやすいトピックであることが推測できる。

4. 考察

本論では、シラバスに示された授業の概要、到達目標、授業計画に関する記述を分析することによって、以下の点を明らかにした。

まず、スポーツマネジメントについて教える授業のなかでは、日本社会全体・企業・学校・地域社会といった様々な次元での取り組みが授業の対象として取り扱われているということである。プロスポーツチームのマネジメントなど、おそらく学生が「スポーツマネジメント」の例としてイメージしやすいビジネスの側面は、実際の授業の中ではともかく、理念としては必ずしも中核に置かれていないことが考えられる。

次に、それらの事象については理論と実践の両面からの議論や検討が重視されているということである。

さらに、最も注目されるテーマはスポーツに関わる組織であるが、集団を組織化する側面がマネジメントの範疇としてとらえられる例は少なく、すでに組織化されている組織をどのように運営するか、という部分がマネジメントだとみなされていることがうかがえることである。

これらの点に基づいて考えれば、スポーツマネジメントをテーマとした授業の今後の課題は、スポーツに関与する集団の組織化により光を当てることである。すでに構造化されている組織がどのように運営されているかということに加え、まだ特定の組織として認識されていない集団や事象をスポーツ組織として構造化していくことは、スポーツ産業に新しい可能性をもたらすことにつながる。

たとえば、新型コロナウイルス感染症の流行が拡大する状況下で、ライブ配信や動画の共有といった手法を用いて自宅でできるフィットネスの需要が拡大されたといわれる⁸⁾。そのようなコンテンツは、従来のスポーツジムだけでなく、個人のフィットネストレーナーによって制作され拡散される例も多く見られた。動画を作成し配信する YouTuber などの個人とそのフォロワーという集団は、むしろスポーツ組織として構造化されたものではないが、今後のスポーツマネジメントを考えるうえでひとつのキーワードになってもおかしくない。こうした新しい事象をもスポーツマネジメント教育の範疇に入れていくために、「組織化」という視点は有益だろう。

同時に、こうしたオンラインでの取り組みは、スポーツや健康に限らず「遊び」や「エンタテインメント」の領域とも接合する場合がある。若者の間で人気があるダンス動画の共有（自分たちでダンスをやってみた動画を共有することなど）は、スポーツの文脈で行われて

いるものではないにもかかわらず、今後のスポーツ産業やスポーツ教育にとって重要な契機となり得る。本論の分析では、「エンタテインメント」や「娯楽」「遊び」という語がシラバスの中で使用されている例が全くなかった。このような視点をスポーツマネジメントの発展的な議論のために取り入れることも、今後の課題ではないかと考える。

参考文献

- 1) 松岡宏高 (2008) 「日本の大学におけるスポーツマネジメント教育の現状と課題」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』, 5, 71-76.
- 2) 櫻井貴志・田島良輝・西村貴之・神野賢治・佐々木達也・岡野紘二 (2017) 「日本の大学におけるスポーツマネジメント教育に関するカリキュラム分析」『スポーツ産業学研究』 27(4), 4_333-4_340.
- 3) 備前嘉文・辻洋右・棟田雅也 (2019) 「日本の大学におけるスポーツマネジメント教育の現状と課題:この10年で日本のスポーツマネジメント教育はどう変わったか」『スポーツマネジメント研究』 11(1), 37-46.
- 4) 執筆者不明 (2020) , 「スポーツ関連大学の入試情報一覧 (2020年度)」『スポーツ産業学研究』, 30(4), 415-421.
- 5) 長積 仁 (2020) 「スポーツマネジメント論」立命館大学シラバス.
- 6) 田蔵奈緒 (2020) 「スポーツマネジメント」東洋学園大学シラバス.
- 7) 野口垂弥 (2020) 「スポーツマネジメント特別講義」順天堂大学シラバス.
- 8) 澤田まり子 (2020) 「新型コロナでオンラインフィットネス需要拡大 ジム支援の取り組みも」 <https://www.wwdjapan.com/articles/1063954>.

A study on sport management education by an analysis of syllabi

Kotaro Noda

This paper analyzed 106 course syllabi for sport management education in Japanese universities. The focuses of analysis were on descriptions of courses, the learning objects of each course, and teaching schedules. As a result, three features were identified; (1) most courses covered different levels of managements of sport organizations of companies, schools, and local societies as well as considering about the role of sport managements for the society as a whole; (2) in general, students were encouraged to consider sport management both theoretically and pragmatically; (3) sport management was likely to be discussed from the viewpoint of managements of existing sport organizations and only three courses dealt with the process of organizing. The results indicated that one of the future tasks for sport management education would be to put a brighter light on the methodology of organizing sport groups.